

三条遺跡物語

第79話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち① ～はるかなる一万五千年前の石器～」

八十里越の向こう側は、福島県南会津郡只見町…。『只見町史』を見ると下田地区と似た石器の実測図を見つけました。それは猿倉遺跡（只見町塩沢）のナイフ形石器です。一見すると別の形の石器に見えますが、細かい点を観察すると同じ石器であることが分かります。縦長剥片を素材に両側縁に加工が加えられた元々は柳葉形の石器で、上部が折れてしまっています。元の形は下田地区にある荒沢遺跡（荒沢）の石器に似ているのです。

これは「杉久保型ナイフ形石器」という今から1万5千年前の旧石器時代の石器で、東北地方を中心に分布しています。当時は、今よりも寒い氷河期でオオツノシカなどの大型動物を追って集団が移動する狩猟採集社会でした。この石器は、狩猟に用いられた槍先と考えられています。

石器の性能は、猟の成功を左右し集団の生死に関わるもので、その形は非常に重要でした。同形の

石器からは、八十里越を越えて人の行き来があり、交流があったことが伺えます。

八十里越を介した先人たちの往来は、1万5千年前の石器にその原点を見ることができます。

遺跡から見た八十里越を通じた人との往来について見ていくことを今回から6回シリーズでお届けします。
お楽しみに…。



杉久保型ナイフ形石器

左：荒沢遺跡出土

右：猿倉遺跡出土

（上部欠損、『只見おもしろ学ガイドブック』

2013 只見町）

三条遺跡物語

第80話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち② ～5000年前に行き交った黒いダイヤ～」

5000年前の縄文時代中期の遺跡から驚くべき事実が明らかになりました。「黒いダイヤ」と言われている「黒曜石」の産地が只見町にある窪田遺跡（只見町大字大倉*）と三条市の長野遺跡（三条市長野）で共通しているのです。

黒曜石は、火山の噴火などの際にできる天然のガラスで、割ると鋭い刃ができる石器の材料としては最高のものです。産地が限られ、旧石器時代や縄文時代には貴重な交易品として流通していました。三条市の遺跡からも、数は多くありませんが、出土しています。

黒曜石にX線を当てて産地を分析すると、窪田遺跡の黒曜石は、信州産と栃木県高原山産と新発田市板山産であることが分かりました。一方、長野遺跡の黒曜石は、高原山産と板山産と秋田県男鹿半島産などであることが分かりました。

遺跡と黒曜石産地の位置関係から、窪田遺跡と

長野遺跡から見つかった栃木県高原山産の黒曜石は、只見側から三条側へ八十里越を越えてもたらされた可能性が高いものと考えられます。

また新発田市板山産の黒曜石も、三条側から只見側に八十里越を越えてもたらされたものかもしれません。黒曜石の産地から、およそ5000年前から八十里越が交易ルートとして機能していたことが伺えます。

*窪田遺跡は、縄文時代から弥生時代の遺跡で、福島県指定史跡として保存され、発掘が終了した部分に、会津只見考古館が建ち遺物が展示されています。



長野遺跡の黒曜石製石器

三条遺跡物語

第81話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち③ ～峠を越えた縁～」

以前は、八十里越を挟んで、結婚して向こうへ行ったりこちらに来たりしていたと聞いたことがあります。遺跡出土の土器にもそういうことではないかと考えられるものがあります。

いい湯らていの第二駐車場から北五百川集落へ向かう道路周辺は、近くにあるお寺の名前を取って成就院脇遺跡（北五百川）と呼ばれています。

平成14年の発掘調査では、直径2㍍ほどの穴がほぼ一列に並ぶように10基見つかりました。これらの穴の一つから、関東が分布の中心である加曽利B式土器（縄文時代後期、約3500年前）がまとまって出土しました。

深鉢と片口と浅鉢（写真中央）があり、沈線や細かな縄文で繊細な装飾が施され、器面が美しく磨かれています。特に片口や3つの突起が付いた浅鉢は、形が珍しく、特別に作られた土器という感じがします。

この穴は、形や大きさから墓穴と考えられ、これら

の土器はこの穴に葬られた人に捧げられたもので、この人の出自を表しているものと考えられます。

そのように考えると、この墓に埋葬されたのは、関東にゆかりのある女性であり、遠く関東から北関東を経由して八十里越を越えて、成就院脇ムラにやってきた花嫁だったのかもしれませんが。この時代、八十里越は、只見地域と三条地域をつなぐだけのものではなく、北関東を経由して関東と越後をつなぐ道でもあり、他地域との交流の玄関口であったといえます。



成就院脇遺跡出土の土器

三条遺跡物語

第82話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち④ ～弥生時代の到来と会津地方とのつながり～」

第25話で紹介した弥生時代中期後半の内野手遺跡（上野原）からは、方形周溝墓という西日本の造り方の墓が発掘されています。この墓は、弥生時代前期末に近畿地方で最初に作られ、その後、稲作の普及とともに東日本に伝わりました。

四方に溝がめぐらされていますが、北側の溝からは会津地方や中通地方に分布の中心を持つ「山草荷やまそうか式土器」の壺が出土しています。胴部上半部には、平行線で渦巻文などを描き、下半部には縄文が施される縄文土器の延長上に生まれた弥生土器です。壺の上半部分のみ出土しましたが、埋葬儀礼の際に、割られたものと考えられます。

墓の形は、近畿地方のものをほとんどそのまま受け入れているにもかかわらず、土器は会津地方などと共通する縄文土器系統のものを使っています。そこには、新しい文化によって、暮らしの全て変えてしまったわけではなく、「縄文」に象徴されるそれ以前の

伝統を受け継ぎ、古くから続く地域の結びつき、会津の人々とのつながりを大事にした内野手ムラの人々の姿が感じられます。

この時代もやはり八十里越を越えて人々は交流し、血縁関係もあつたことが考えられます。

内野手遺跡の山草荷式土器は、現在、新潟県立歴史博物館で行われている企画展「弥生時代のいにがた～時代がかわるとき～」で展示されています。時代が変わっても、変わらない地域のつながりをご覧ください。



内野手遺跡出土の
山草荷式土器

三条遺跡物語

第83話

生涯学習課 文化財係
☎256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち⑤ ～賽ノ神遺跡に祀られた石棒～」

今は大谷ダムに沈んでしまった^{さいのかみ}賽ノ神遺跡（大谷）では、^{そうたいどうそしん}双体道祖神（賽ノ神）とともに長さ78^{まつ}ツもの長大な石棒が祀られていました。地元の人によると以前近くの畑を耕しているときに出土したものとのことです。出土した後、道祖神と同じように信仰の対象となっていたようです。

石棒は、縄文時代に石で男性器を形作ったもので、広場の中央に立てられ祭りに用いられたり、竪穴式住居の奥の祭壇に祀られたりしていました。賽ノ神遺跡の石棒は、県内最大級の大きさであり、その大きさや石材から縄文時代中期の火焰土器の時代（約5千年前）のもので、住居の中ではなく、広場などに立てられたものと考えられます。

現代においても男性器を祀ることは行われていて、月岡の山神社には、石碑を囲むようにいくつかの大きな木製の男性器が置かれています。長さは約150^{センチ}、^{センチ}「村内安全」と墨で書かれています。これは、

集落の大工が毎年持ち回りで製作し、奉納しているとのことです。以前は、山神社のある山と沢を挟んだ山に石製の女性器が祀られていたそうです。

八十里越を越えた福島県只見町では、家を新築する際に、大きな木製の男性器と女性器を作り、^{むなご}棟木に向き合わせて取り付けます。これは「火伏せ」と呼ばれ、火事にならないことを願って行われる習わしです。

材質はいろいろありますが、男性器や女性器には大きな力があると信じられ、祈りや願いが込められている点では縄文時代も現代も同じです。

賽ノ神遺跡の石棒は、11月24日まで新潟県立歴史博物館秋季企画展「石仏の力」で展示されています。現代によみがえった賽ノ神遺跡の「石棒の力」をぜひご覧ください。



賽ノ神遺跡に祀られた
石棒

三条遺跡物語

第84話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち⑥ ～保内三王山古墳群と大和王権北進の道 その1～」

保内三王山古墳群(上保内)は、古墳時代前期と後期に造られた17基の古墳からなる古墳群です。

1600年前の古墳時代前期に、蒲原平野の信濃川右岸地域を支配した三条の豪族は、大和王権によって認められ、代々上保内の丘陵の尾根筋に、前方後方墳(4号墳)、造出付円墳(11号墳)の順に大形化しながら、形をより大和王権との結びつきが強いものへと昇格させ古墳を造りました。そして、最終的に古墳群中最大の全長38mの前方後円墳(1号墳)を築くまでになりました。

これらの古墳が造られる半世紀ほど前の弥生時代後期に、経塚山遺跡(如法寺)や二ツ山山頂遺跡(上保内)などの丘陵の山頂部に、戦乱に備えて防御性の高いムラが北陸の能登地方と強い結びつきを持つ集団によって造られました。その戦乱が幕を閉じ、地域の支配権を確立した勢力の子孫たちが、この古墳に埋葬されている豪族であったと推定されます。

同じ頃、蒲原平野の信濃川両岸の丘陵部には、いくつもの古墳が造られました。それらの古墳の形で、大和

王権と地方豪族との結び付きを示す象徴の一つとしてあったのが前方後円墳でしたが、この地域には3基しか発見されていません。信濃川左岸の丘陵部にある菖蒲塚古墳(新潟市=旧巻町)、稲場塚古墳(弥彦村)と信濃川右岸の保内三王山古墳群1号墳だけです。

周辺地域の前方向後円墳の分布をみると、日本海側では能登地方に、内陸側では会津地方にその集中が見られます。

(次話につづく)



北陸北東部地方・会津地方の前方向後円墳の分布図

三条遺跡物語

第85話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち⑦ ～保内三王山古墳群と大和王権北進の道 その2～」

保内三王山古墳群（上保内）1号墳は、蒲原平野の信濃川右岸にある唯一の前方後円墳であることを前話で紹介しました。

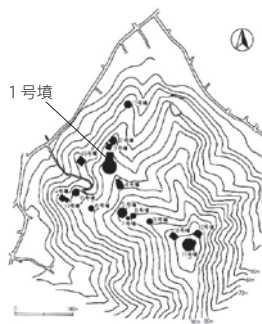
この1号墳は、丘陵の尾根の中腹に、前方部を平野側に向けて築かれた典型的な柄鏡の形をした古墳です。古墳の大きさは、全長38^{メートル}、後円部の高さは西側で4.5^{メートル}、東側で2.6^{メートル}です。

この古墳の特色は、平面の形が左右対称ではなく、平野側の西半分が全体として大きく張り出した形となっていることです。また、古墳の形は、東側から見ると一段ですが、西側から見ると後円部も前方部も二段になっています。これは、狭い地形にもかかわらず、村々がある平野に面した西側の側面をより大きく見せるために、高い設計の技術で造られたのでしょう。この優れた造営の仕方は、すでに大和地方の初期の巨大前方後円墳に見られます。近隣の信濃川左岸の菖蒲塚古墳にはこの技法は見られませんが、八十里越でつながる会津盆地の古墳に、この造営の仕方があり注目

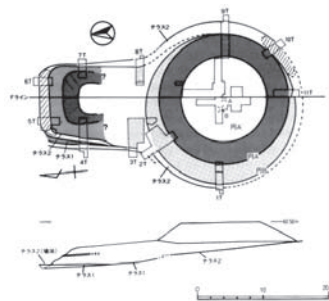
されます。

また、1号墳の後円部墳頂に東西に長い木棺の痕跡があり、東枕で埋葬されたと想像できます。当時の蒲原平野の古墳文化は、北陸地方と同じ様相が多くみられますが、古墳の埋葬の頭の位置は、能登地方では北が多いのに対し、1号墳やそれに先行する11号墳は東に頭があり、会津盆地や那須地方の古墳と同じです。

（次話に続く）



保内三王山古墳群全体図



保内三王山古墳群 1号墳模式図

三条遺跡物語

第86話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち⑧ ～保内三王山古墳群と大和王権北進の道 その3～」

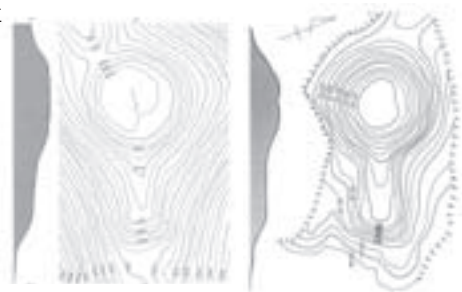
前号では、保内三王山古墳群 1 号墳（上保内）の造り方や埋葬方位などに、会津盆地の古墳と共通性があることを紹介しました。

前方後円墳である 1 号墳に類似している古墳に、会津盆地の西部丘陵にある全長 47^{メートル}の宇内雷神山古墳（福島県会津坂下町）があります。また、この古墳に隣接する出崎山古墳群（会津坂下町）や全長 114^{メートル}の巨大な会津大塚山古墳（福島県会津若松市）などにも造り方の共通性が見られます。

それは、大和王権と緊密な関係を持ち、畿内の古墳の様式を正しく伝える高度な土木技術者の派遣を受けて造られたものだからでしょう。

この時期、会津盆地では、東日本でも屈指の巨大な前方後円墳が集中する地域であり、東北南部を到達点に北方支配を推進した大和王権から最も重要視された地域であったことをうかがわせます。大和王権は、この地域の開発のために、強力な支援を行い、大勢の人の移動や膨大な物資の搬入が行われたと思われます。

そこで、重視されたのが、日本海側と会津地方とをつなぐ交通の要衝、三条の地でした。三条は、信濃川流域から会津へのメインルートである八十里越の起点であり、東北南部、会津盆地や北関東に通じる陸運、水運のなくてはならない中継拠点として、大和王権北進の戦略上の高い価値を持っていました。これを掌握したのが保内三王山古墳群 1 号墳の被葬者であったのではないのでしょうか。そしてこの古墳は、八十里越が、1600 年前の古墳時代に、すでに政治的、軍事的に重要な街道であったことを物語っています。



保内三王山古墳群 1 号墳

宇内雷神山古墳

三条遺跡物語

第87話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち⑨ ～五十嵐小豊次 八十里越を越えて鎌倉へ～」

下田郷の飯田に、南に守門岳、東に粟ヶ岳、西に弥彦山を仰ぎ、下田盆地を見渡すことができる眺望のきく絶景のポイントがあります。そこは、武士の居館跡である新潟県指定史跡五十嵐館跡です。この館跡の大きさは東西80m、南北95mで、鎌倉時代から江戸時代初め頃まで使われていたことが調査で明らかになっています。

この館跡は、かつて下田郷一帯が「五十嵐保^{いからしのほ}」と呼ばれ、ここを本拠地としてその地名を名のった越後の武士、五十嵐氏の居館でした。

五十嵐氏の中で特に知られているのが、鎌倉幕府の歴史書である「吾妻鏡^{あづまがみ}」に登場する鎌倉時代前期の五十嵐小豊次^{こぶんじ}（「小文治」とも書きます。）です。

建暦3（1213）年に鎌倉で起こった有力御家人和田義盛の反乱である和田合戦の際に、幕府の警備に当たっていた五十嵐小豊次が討死したと記されています。

「御恩と奉公」の関係で幕府と結ばれた小豊次は、鎌倉幕府の御家人としてこの合戦に出陣したものと

考えられます。鎌倉へは、八十里越を越え叶津（福島県只見町）に出て、奥会津から下野・武蔵国を経由し相模国に至り、鎌倉に馳せ参じたと推定されます。

八十里越は、越後国と鎌倉を結ぶルートとして、越後国の御家人たちと幕府との主従関係の上でなくてはならない政治的に重要な往還道^{おうかんだう}であったことでしょう。



新潟県指定史跡
五十嵐館跡
（空中写真、写真上：北）

三条遺跡物語

第88話

生涯学習課 文化財係
☎0256(46)5205

「八十里越を越えた先人たち⑩ 三条のものづくりルーツ大崎鋳物師 仏都会津へ行く その1」

平成14年に大崎中学校グラウンド脇で県道大面保内線のバイパス工事が行われ、それまで民家が建っていた土地の掘削の際に、金くそなどの鉄のかすが多量に出土し、偶然^{しもちよう}下町遺跡（西大崎二丁目）が発見されました。

遺跡が見つかった大崎地区には、鉄や銅などの金属を溶かして型の中に流し込み、いろいろな金属製品を製造した「大崎鋳物師」と呼ぶ職人集団がいて、蒲原郡と古志郡で鉄鍋を製造・販売していたことが古文書から知られていました。

発見された下町遺跡は、すぐに発掘調査が実施されました。おびただしい数の柱^{はしら}穴^{あな}が発掘され、金くそなどの他に、鉄鍋の鋳^い型^{がた}の破片が出土し、この遺跡の場所が、大崎鋳物師が生産拠点とした本貫地の一部であったことが分かりました。

大崎鋳物師は、鉄鍋などの日用品のほか、有力社寺からの依頼で、宗教用具などを製造していました。三条八幡宮に伝えられている鰐^{わに}口^{ぐち}がその1つです。文明3（1471）年に棟梁^{とうりょう}江口行安^{えぐちゆきやす}と脇棟梁^{わきとうりょう}の左衛門^{さえもん}太郎^{たろう}が

鋳造の中心となって作られたことが、本体に彫られています。

また、明応5（1496）年に同じく蒲原郡の弥彦神社に奉納され、現在宝光院（弥彦村）に伝えられている鰐口があります。これは三条八幡宮の鰐口とほぼ同型で製造技法などに共通する特徴があり、大崎鋳物師の作品と推定されます。

いずれも優品で、それぞれ三条市、弥彦村の指定文化財に指定されていて、大崎鋳物師の技術力の高さをうかがわれます。（次話に続く）



三条市指定文化財鰐口
（三条八幡宮所蔵）



発掘された下町遺跡
（東から）